

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 張 雅婷

論文題目 リービ英雄における台湾記憶
—原風景としての異郷体験—

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	田所 光男
委 員	名古屋大学教授	長畑 明利
委 員	名古屋大学准教授	星野 幸代
委 員	龍谷大学准教授	佐々木英昭

本論文の概要

1990年代以降、日本語で小説を発表する外国人作家たちが日本文壇に続々と登場した。それは、従来のいわゆる在日文学とは異なり、あえて自らの意思で母語以外の日本語を創作の手段として選択した作家たちであった。ユダヤ系アメリカ人のリービ英雄は、そうした新たな日本語作家たちの先駆的、かつ代表的な存在である。本研究は、リービ英雄の発表した、小説、評論、エッセイ、対談など広汎なテキストを対象にして、リービ英雄の創作活動における台湾経験の重要性を解明するものである。

リービ英雄は、外交官である父の仕事のため、幼少期を台湾で過ごしている。その異郷で、両親は離婚し、父は台湾で知り合った上海出身の中国人女性と再婚した。こうしてリービ英雄は、母と重度の知的障害をもつ弟と共にアメリカに戻らざるをえなかった。しかし1967年、横浜のアメリカ領事館に転任した父を訪ねる。そしてその時の日本体験こそが、彼が日本語作家としてのキャリアを切り拓く転換点となった。もちろん、リービ英雄の越境経験は、台湾と日本の場合には限られない。1993年以降における中国体験もきわめて重要であり、とりわけ、最初の北京滞在は、台湾での幼少期の記憶が還帰するという決定的な出来事をもたらした。以後、リービ英雄は、台湾で家庭崩壊を経験したにもかかわらず、終始台湾を「故郷」とであると明言することになる。

本論文は、台湾、香港、アメリカ、日本、中国を移動するリービ英雄の多様な越境体験の記述を分析しながら、彼の人生、及び創作の原点となった台湾経験を考察するものである。これまでの研究では、西洋出身の日本語作家としての彼の越境体験がしばしば強調されてきたものの、彼の台湾時代の経験、特に、創作活動全体における台湾記憶の重要性については十分に解明されてはこなかった。本論文は、こうした先行研究の不十分な地点に踏みこんでいくことを主たる目的とする。

本論文はまず序章において、問題意識の全体とその意義、および研究方法を提示し、その後5つの章を用意している。以下各章の概要を示す。

第一章では、リービ英雄の描く父親像の変貌を検討する。第一作『星条旗の間こえない部屋』(1992)は、17歳の白人青年が父との確執を深めて在横浜アメリカ領事館を飛び出し、新宿の日本語世界に踏み込んだ、その放浪の体験を描き出した小説である。リービ英雄のこの処女作は、以後のすべての小説と同じように、リービ英雄の実人生にきわめて即したものであり、私小説的作風をとっていると言える。ここで描かれた父親像には、その「ユダヤ出自」や「中国文明の教養」なども重要な構成要素として組み入れられているが、中心となっているのは、息子の立場から見た権威的な父親イメージである。主人公は、そうした父に対抗するため、日本人たちからは「外人」と拒否される場面に遭遇しながらも、日本語を自らの表現手段として獲得していった。しかしながら、そうした父との対立関係は、その後の小説「ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行」(2002)や短編「我是」(2008)においては変化を遂げている。主人公は、中国開封のシナゴグを訪れたことをきっかけに、ユダヤ人のディアスポラの歴史を「越境」の比喩にとらえ、そこにポジティブな意味を見出し、ユダヤ出自の亡き父への思いを吐露することになったのである。

第二章では、これまでのリービ英雄研究の中では十分に検討されてはこなかった、「母」、「弟」、

「アメリカ」という三者について考察する。こうしたテーマを語る場合にも、リービ英雄は私小説的手法をとっている。小説「ノベナバー」(1989)は、1960年代初頭のアメロカにおける母子家庭状況、特に、神経衰弱の母について語り、「国民のうた」(1997)では、ここで初めて、かつ、ここだけで、知的障害者の弟を大きく登場させ、その養護に苦悶する母の姿に焦点を当てている。知的障害児を抱えたことで夫婦関係が変化し、それが両親の離婚にもつながったこと、また、母と弟と一緒にアメリカに戻った主人公は弟の介助役を担わされることになったこと、障害児を抱える母子家庭の困難は、父と使用人の居た台湾の家を懐かしませたこと、さらに、そうした様々な状況が、主人公に窮屈なアメリカから逃げ出したいという欲望を生じさせたことなどを考察する。リービ英雄における知的障害者像に対しては、津島佑子による批判がある。津島にはダウン症の兄があり、自らのその経験を題材にした小説も発表している。本章では、津島とリービにおける、障害児を抱える家族の描き方の違いを分析することで、リービ英雄の特色を明らかにする。

第三章では、台湾記憶をはじめて中心に据えた作品である小説『天安門』(1996)を取り上げる。この小説には1950年代の台湾をめぐる複雑な歴史的な文脈が関与している。台中で家族の住んでいた家は庭付きの木造家屋であり、それは日本人植民者が残していったものであった。その家に溢れる言語はもはや日本語でもないし、また台湾の言語でもない。家族の使う英語であり、また、中国共産党に追われて本土から来た将軍たちと父が語り合う北京語である。この台湾の家は、冷戦時代を背景に毛沢東や共産党の脅威にさらされ、また、周りに住む本省人の存在や彼らの話す台湾語に対する恐怖にも浸透されて、リービ英雄の特異な原風景を形成しているのである。日本統治時代の「大和村」から戦後の「模範郷」へという、居住地の現実空間の変化を検討しながら、小説の中に描かれた主人公の空間体験を解明する。さらにまた、リービ一家とほぼ同時期に台湾に滞在していたアメリカ人家族の体験との比較検討も行う。V. S. de Beausset 一家は民間人として台湾に派遣されて、台北の北投付近の日本住宅に住んでいた。この家族の台湾経験を分析して、リービ英雄一家の場合との同異を明らかにする。

第四章では、小説「満州エクスプレス」(1996)に登場する「安部先生」像を考察する。ここでもリービ英雄の手法は私小説的であり、この小説は、1994年に安部公房の遺族らとともに訪れた旧満州での調査が基になっている。本章は、作中の「安部先生」像と、作家安部公房との差異に注目して、リービ英雄の創作手法を解明する。「安部先生」像の造形には、自らの台湾体験を基にした「異郷に自分の家がある」という意識に加えて、旧満州訪問で一層自覚された〈団欒願望〉という創作動機が重要な役割を果たしているが、それを考察するにあたって、安部公房とリービ英雄それぞれの作品に見られる「塀」の描写に注目する。台湾を「故郷」と捉えるリービ英雄は、「塀」の内側にある日本家屋や北京語の響きに「幸せ」を感じ取っているが、「塀」の外側にいる本省人とその解読不能な台湾語には恐怖を覚えている。それに対し、故郷喪失者とされる安部公房は、満州の風景をストレートには作品化せず、要素にまで解体して、それを利用して、植民地や敗戦の記憶を描き出しているのである。

第五章では、リービ英雄における中国像の変貌を考察する。1993年以降、リービ英雄はたびたび中国を訪れ、それに伴って中国描写の比重が大きくなってきている。本論文第三章で検討したように、中国は、最初、台湾記憶を喚起する装置として専ら使われた。しかし、紀行集『我的中国』(2004)以降の作品になると、それ自身が創作活動の対象となる。日本語と中国語の

同異に触発された小説『仮の水』(2008)、毛沢東の革命聖地での見聞を語った『延安』(2008)、さらに、河南省の農民を描く『大陸へ』(2012)など、中国が広範囲かつ多様な視点で描かれて行く。しかし、このよう変貌は認められるものの、そこに通低しているのは、かつて家族で暮らした台湾への遥かな憧懐であり、中国本土の古い路地や煉瓦の風景を通して、リービ英雄が、自らの失われた時を探し求めていることを明らかにする。

本論文の評価

現代日本で活躍する外国人日本語作家の代表的存在であるリービ英雄については、社会的な注目度はかなり高いものの、その関心は学術の領域での研究の進展には必ずしも結びつかず、この作家の研究には、まだほとんど未開拓とも言える分野が残されている。本論文は、リービ英雄の多様な種類の著作を、最近の発表作までも視野に入れて詳細に検討することを通じて、この作家における台湾経験とその記憶の還帰という領域を本格的に開拓するのに貢献する貴重な研究であると評価できる。

この総括的な評価は、以下、三点での高評価項目に分析して説明できる。

第一に、リービ英雄についての先行研究でしばしば強調される越境の側面を相対化するべく、彼のいわば原点として台湾経験を提示できたことは、今後のリービ英雄研究にとって重要な成果であったと言える。

第二に、台湾経験を創作の源泉と見なすことは、リービ英雄における家族のテーマを徹底的に解明することにつながった。台湾での「幸福」であった家庭は、障害をもった弟の誕生によって崩れて行った。兄である子供が、父、母、弟と取り結ぶ、単純ではない関係を詳細に分析できている。それは、リービ英雄という作家が、日本の近代文学の一つの伝統と言える私小説を自らのものとして小説家となったことを明らかにすることになった。また、障害者を家族に持つことのテーマの追求において、津島佑子とのとの比較は、リービの特徴を浮き彫りにするのにきわめて効果的であった。

第三に、リービ英雄の著作を、20世紀以降の東アジアの政治的変貌の中で読み解くことができた。特に、満州で育った安部公房の小説との比較考察が優れていた。否応なしに植民者側に所属していた安部も、アメリカの台湾支援という外交関係によって台中に住み始めたリービ英雄も、ともに子供時代の貴重な場所を単純には故郷とは呼べない。このような、自分の故郷が異郷にあるという共通性を追求して、安部公房とは異なる、リービ英雄における故郷願望を明らかにできたことは、本論文の優れた成果であった。

ただ、リービ英雄の創作全体における「ホーム」というテーマについての考察が不十分であること、私小説作法の特性の解明をもっと深めるべきであること、等が口述審査の場で指摘された。しかしそれらも、本論文全体の評価を損なうものではなく、今後の研究の展開に期待することにした。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が課程博士学位(文学)を授与されるに値するものであると判断した。